



新光証券株式会社

機関投資家との相互接続を短期間で実現 株式売買手法の高度化に対応へ

証券業に実績あるベンダーを起用し半年で基盤構築を完了

■要件

機関投資家と証券会社の注文管理システムを接続するFIXシステムを、刷新後の株式トレーディング・システムに導入する予定だった。2005年になると業界標準としてFIXを使う動きが活発になり、その対応が急務となった。

■ソリューション

短期構築を優先し、証券会社向けのシステム構築に実績のある新日鉄ソリューションズを指名。運用を容易にするため、接続先のOMSと交わす電文の差異は、アプリケーション本体ではなく設定ファイルで吸収する仕組みを採用した。

■成果

2005年、FIXシステムの導入が完了した。機関投資家のOMSとFIXプロトコルで接続する作業もスムーズに進んでおり、2006年中に当初の計画通り30の機関投資家との接続が完了する見込み。

急激に普及したFIXへの 機関投資家の要望が高まる

新光証券は、2000年4月に和光証券と新日本証券との合併により誕生した証券会社だ。みずほフィナンシャルグループの総合証券会社として、機関投資家、一般投資家の双方に向けた幅広い金融・投資サービスを提供する。競争の激しい金融業界にあって、「クライアント・ファースト」をビジョンに掲げ、常に顧客本位のサービスを展開している。

その新光証券は、業務効率、機能のさらなる向上を図るため、合併で複雑になった株式トレーディング・システムの全面的な刷新を進めていた。ところが2005年に喫緊の課題に直面する。それはFIX接続への早急な対応だ。

FIXとは、機関投資家のOMS（注文管理システム）と証券会社のOMSを結ぶ電文通信プロトコルのこと。その利点について、新光証券のIT戦略部テクノロジー室マネージャーである伏木通高氏は「FIXによってさまざまなOMSと注文や約定情

報を交わせるようになり、電話注文時における言い間違い、聞き間違いというミスに起因するリスクを排除できます」と説明する。

新光証券はFIXの有用性をいち早く認識し、2003年には導入を決定するが、実際のシステム構築は後回しにせざるを得なかった。IT戦略部ITソリューション課長の松岡賢一氏は「新しい株式トレーディング・システムの構築が進んでいたため、旧システムにFIXを導入すると二重投資になってしまいます。FIX自体も、2003年当時、国内ではそれほど普及していませんでした。こうしたことから、FIXの導入は機関投資家向けの機能も持ち合わせた株式トレーディング・システムの刷新後に行う計画でした」と振り返る。

ところが2005年に状況が一変する。FIXが機関投資家の間に急速に広まり、瞬く間に業界標準となった。株式市場の活況と取引量の増大に合わせ、リスク回避と機動性向上を図るべく、ストレート・スルー・プロセッシング（STP、取引に人手

を介さずに自動で一貫処理させること）への志向が高まったためだ。

こうした流れを受け、新光証券に対しても機関投資家からFIX接続への要望が高まっていく。松岡氏は「コンプライアンス遵守、取引量の増大に伴い、機関投資家によるブローカーズ・ポイントの評価基準の一つになってきました。当社としても先延ばしにできない状況になったため、株式トレーディング・システムの刷新にめどが付いた2005年6月に、FIXシステムの構築を並行して始めました」と、計画を前倒した経緯を語る。

短期間でFIXを構築するべく 開発ベンダーは実績を重視

そのFIXシステムの構築で新光証券が求めたのは、第一にシステム稼働までのスピードだった。そのため開発パートナーには、証券会社向けシステムの構築実績を重視し、新日鉄ソリューションズを指名した。その理由について伏木氏は、「新日鉄ソリューションズとは、ジャスダッ



新光証券株式会社
IT戦略部
ITソリューション課長
松岡 賢一氏



新光証券株式会社
IT戦略部
テクノロジー室 マネージャー
伏木 道高氏



新光証券株式会社
IT戦略部
ITインフラ課
小林 弘季氏

ク市場のマーケットメイク・システムの構築などで付き合いがありました。開発現場でも高機能・高性能なシステムを、素早く確実に作ってくれる印象を持っていました」と明かす。プロジェクトをスムーズに進めるため、証券取引の慣習や約束事などの知見があること、新日鉄ソリューションズの実績を評価したという。

またIT戦略部ITインフラ課の小林弘季氏は、「FIXは業界標準とはいえ実際の電文は機関投資家によって異なります。この差異を吸収する方法として、アプリケーション本体の外部に、機関投資家ごとの設定ファイルを用意するという提案をもらいました」と話す。FIXシステムの構築ノウハウを持つ新日鉄ソリューションズだからこぞできた提案だ。

こうして2005年7月に設計が始まったFIXシステムは、同年12月の完成に向けて動き出す。工期が短いことから、新日鉄ソリューションズは

開発方式にスパイラル型を採用。開発プロセスを、通信基盤の構築、アプリケーションの開発、エラー制御という三つのフェーズに分け、迅速にプロジェクトを進めた。結果、予定どおり6カ月で完成に漕ぎ着ける。

松岡氏は「当初は4カ月程度で作りたいと考えていましたが、急ぐあまり、テストや改修が増えて工期が長びく恐れもありました。また注文執行に直接結びつくシステムでもあることから、トラブルなく稼働させる必要があります。そういう面からも、工期は長くなっても確実に作るという新日鉄ソリューションズの提案を受け入れて正解でした」と話す。

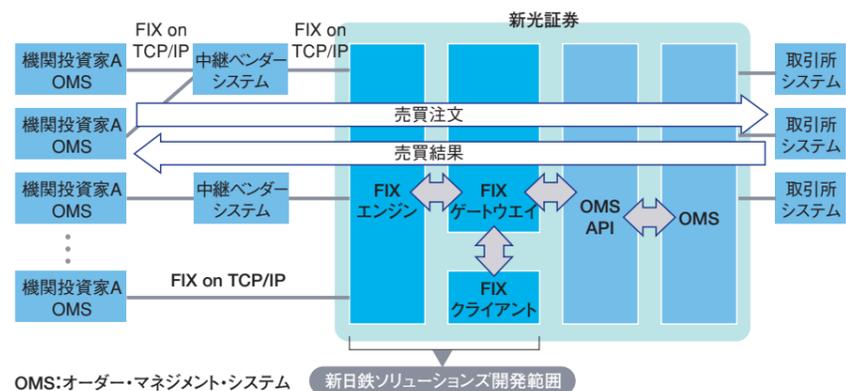
FIX接続の初期作業はスムーズ 年内に30機関との接続を目指す

完成したFIXシステムは、運用面でも新日鉄ソリューションズのノウハウが功を奏している。小林氏は

「機関投資家のOMSと接続する作業は、FIXゲートウェイの設定ファイルを作るのが中心で非常にスムーズです。FIXシステムのプログラム・ソースの改修を要するイレギュラーなケースもほとんどありません」と話す。現在は月に3件のペースで接続が進捗しており、年内には30の機関投資家のOMSとの間でFIX接続が完了する見込みだ。

FIX接続整備後の新光証券の戦略について、松岡氏は「システムの高速化で株式市場がミリ秒で動く世界に変わっていくと、アルゴリズム・トレード（一定のルールに基づいた自動取引）の需要が高まると予想されます。今後は、この分野に力を入れて存在感を高めていきたいと考えています」と話す。新光証券に植え付けられたFIXシステムという種は、新しいサービスの芽を出し始め、大きな成果を实らせそうだ。

■FIX接続システムのイメージ



■コアテクノロジー
スパイラル・モデルによる開発、XML

- システム概要
●運用サーバーの機種、OS、台数：Sun Fire V440 (Solaris 8) ×2台、Sun Fire V240 (Solaris 8) ×2台
●クライアント数/主なOS：Windows2000×14台
●主要アプリケーション：FIXゲートウェイ、FIXエンジン、FIXクライアント
●ミドルウェア：TIBCO Rendezvous
●データベース管理システム：Oracle